

ステンドグラスと ともに33年 ものづくりへの情熱は熱く

ガラスアート作家 保母祥子さん



アトリエ内、手前の円形のもの
が関東学院中高部へ納めた作品。



京王井の頭線 西永福駅 新
棟（改札口を出たところ）にあ
る作品



東伏見コミュニティセン
ターの階段踊り場のステ
ンドグラス窓

アトリエホボ
西東京市南町1-5-10
☎042(463)5716



小さなランプからヨーロッパの大聖堂の壮大な窓まで、ステンドグラスの彩りとあたたかな光は私たちの眼を魅惑してやまない。

保母祥子さん（71）はステンドグラスの作品を創り続けて33年。公共施設やホテル、駅や空港のVIPラウンジ、レストラン、一般住宅など、全国さまざまな場所にガラスアート作品を手がけている作家だ。

この夏も関東学院中高部のチャペルに設置する円形のステンドグラスを制作。9月に完成し、10月初め学内でのお披露目が行なわれた。

保母さんは若い頃からステンドグラス作家を目指していた訳ではない。

結婚後、夫のマージャン仲間と保母さんの作る料理がおいしいので、当時食べ物屋がほとんどなかった神田でレストランをやらないかと勧められた。商売の経験が全くなかったものの、持ち前の行動力で1男2女の子育てをしながら、大学生のアルバイトを使い、レストランオーナーになった。8年間続けたが、日々の

忙しさに自分が埋没しそうになったこと、また周りに食事処も増えたことで閉店した。

その後の180度転身がすごい。ご主人から「絵が好きなんだから、ステンドグラスをやってみたら」と勧められ、本で作品を見て気に入った作家、松田日出雄氏のアトリエを突然訪ね、生徒にしてもらったのだ。「私はこう見えても従順なのよ。人の勧めにのってみて、一度始めたら突き進むタイプ。当時の月謝2万円は高かったけれど、お金をかけるからこそ一人前になりたいと思うものです。先生が制作する現場で習ったことが、役に立ちましたね」

ガラスに絵を描く絵付けは女子美大の先生に長年師事、「ガラスを通して光の美しさ」に魅了され、ものづくりの楽しさにはまっていた。

ステンドグラスは色板ガラスをカットして、鉛線と組み合わせることでつくられるが、その制作過程は職人的な技術とアーティスティックなデザイン性が求められる。注文を受けると、まず現場

を見に行く。そして周りの環境や雰囲気合ったイメージを考える。あくまで建物が主でステンドグラスは従、目立ち過ぎるとよくないのだ。鉛の線のポコポコ感がステンドらしさだと思うので、それを活かしたデザインに時間をかけ、試行錯誤する。絵の展覧会によく行くのも、あっと驚くような色づかいを発見するからだ。

「作っている時間が気持ちよくて、出来上がったものを早く見たいと今だに思うんです。ものづくりには人間性が大切です。私がつくるものはわりと骨太で度胸があると言われます」と話す通り、保母さんの作品はどこか大胆で、小気味いい。

アトリエには生徒さんのつくりかけのランプや額などが置かれていて、細かい作業を物語っている。パッチワークのようなガラスのパーツを600枚も使うランプもある。そんなランプを制作中の次女の園子さんは「母のお宅ぶりにはかありませんね。つくること以外は何もできない。方向音痴で自転車にも乗れないんですよ」とにこやかに母親を語る。ご主人は常に保母さんの作品を「すごい、天才だ、センスがある」と称えてきたそう。この名伯楽の上に保母さんの一途な努力があり、後世にも残る作品を生み出してきたにちがいない。

（西東京市在住）